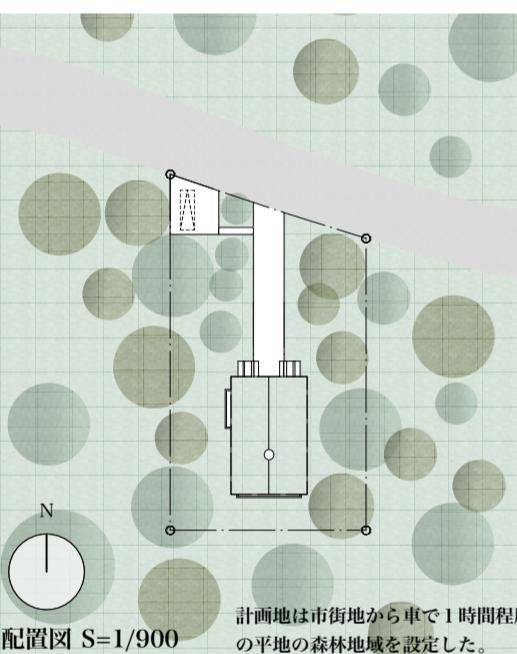


守杜の家

-まもりのいえ-



帰りたい家 = 守られる家

帰りたい家とは、「守られる家」だと考えた。
守られるというのは、家の本質的な目的であり

身を守られ、安心できるからこそ、動物が巣に戻るようには
人は家に帰りたいと思うのではないだろうか。

はじまりの帰りたい家 = 積穴式住居

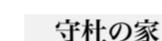
原初の家の一つである竪穴式住居。もともと遊牧民族であった人類は、気候変動によって定住を余儀なくされ、日本では縄文時代が始まる。そこで生まれた竪穴式住居は、人が最も長く住み続け、人を守ってきた、はじまりの帰りたい家であると言える。

空穴式住居の形式は、時代的な工法や材料の制限により必然的に生まれたとされている。その一方で、身を守ることを具体化したような空間構成・地下に潜り、火を囲み、おおらかな屋根が架けられた巣のような空間構成は、対自然に対して物理的・心理的に身を守ることを表現した造形ではないかと考えた。

このような空穴式住居の空間構成や風景との調和を倣いながら、現代に



配置図 S=1/900 計画地は市街地から車で1時間程度の平地の森林地域を設定した



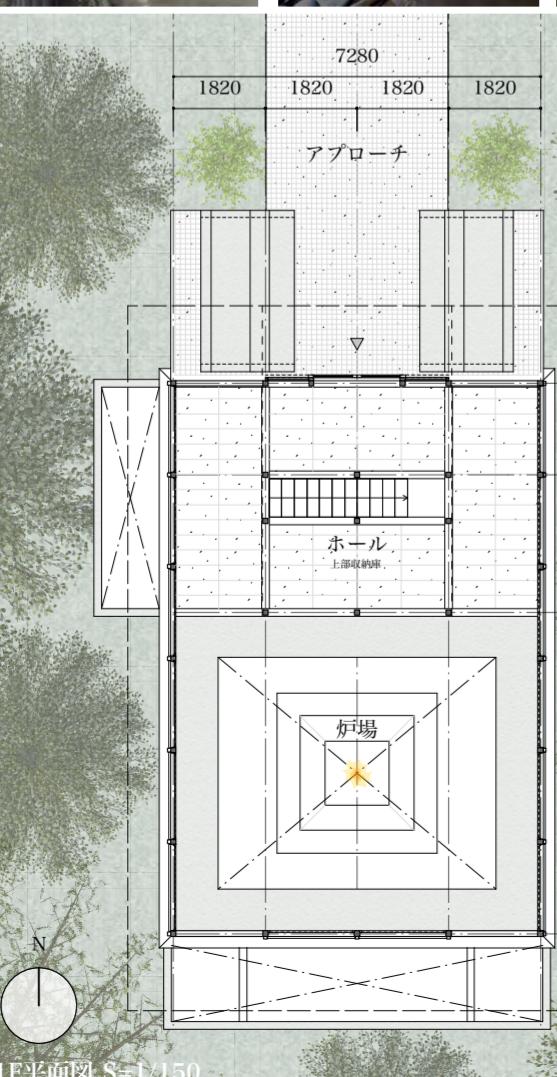
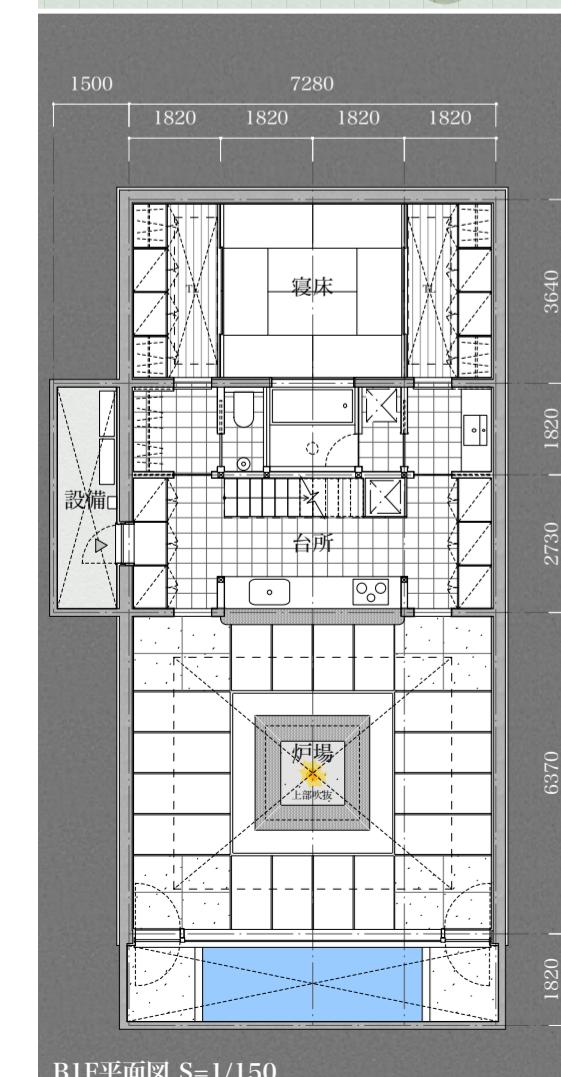
計画は、地下を拠点とした火を閉む空間構成は守りながら、水廻りや寝室を加えた地下1階、地上2階の間口4間の縦長の間取りとした。地上部分は木造、地下部分は土ではなくRC造とし、耐用年数を長寿化させている。

1階は玄関ホール、2階は収納庫となっており、主要生活空間は地下空間として堅穴式住居に倣っている。

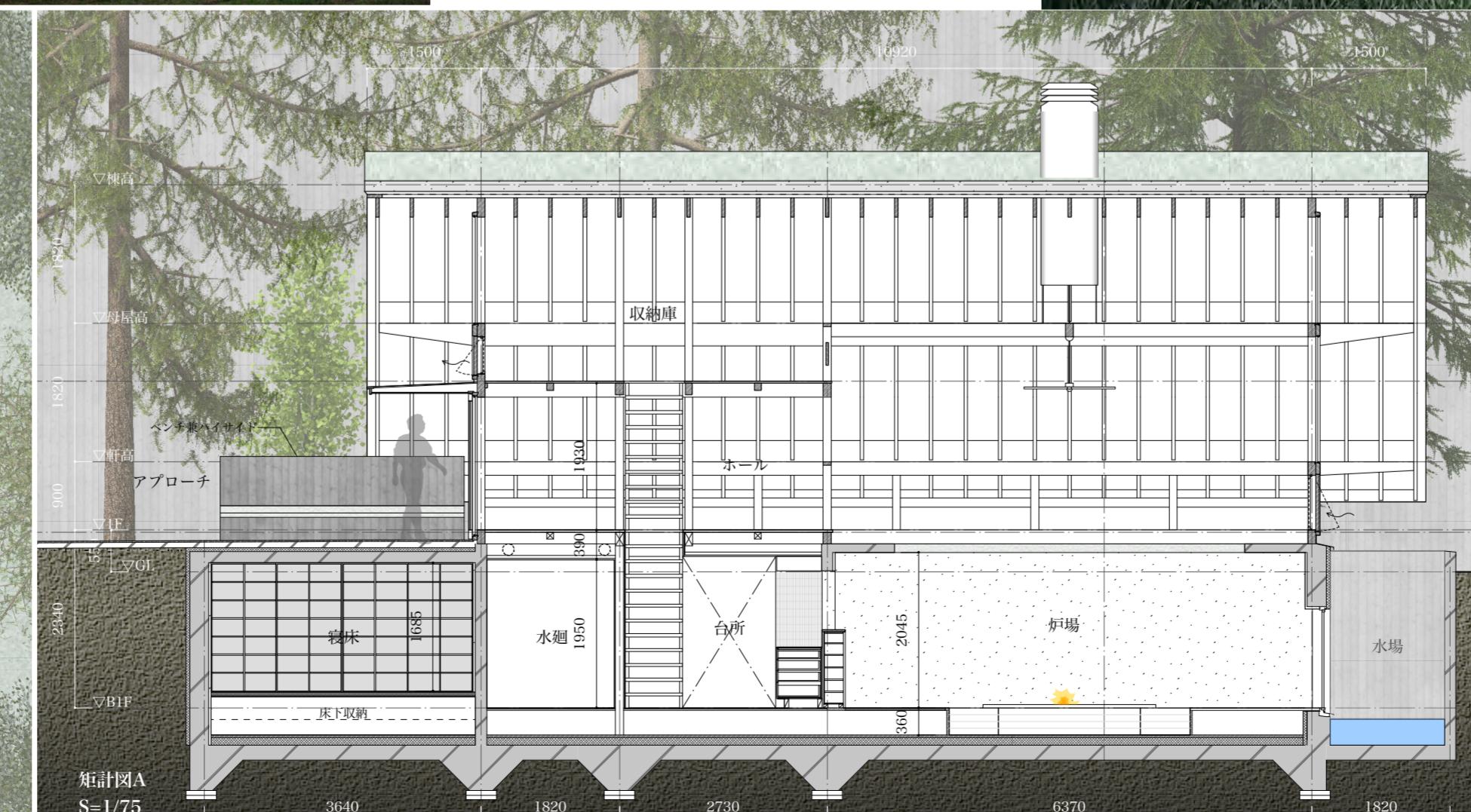
火のある炉場は、居間兼食堂となっており、堀炬燵形式で火を閉み、その延りは畳敷とすることで、寝転べる寛容な居場所とした。炉場上部は中間ダクトファンが設置された煙突と、シーリングファンを併設し、換気排気と空気を循環させ、炉場空間を現代的に成立させている。

妻面の大きな窓からの光、吹抜、木架構あらわし、空堀の水盤などにより、地下の陰湿さは感じさせずに守られる感覚のある空間とした。また、1階の桁行面には電動換気窓が連なっており、通風を調整できる。屋根は45度の切妻屋根とし、屋根緑化とした。緑化は、外断熱の役割を果たしながら、自然や風景と調和も目指した外観としている。

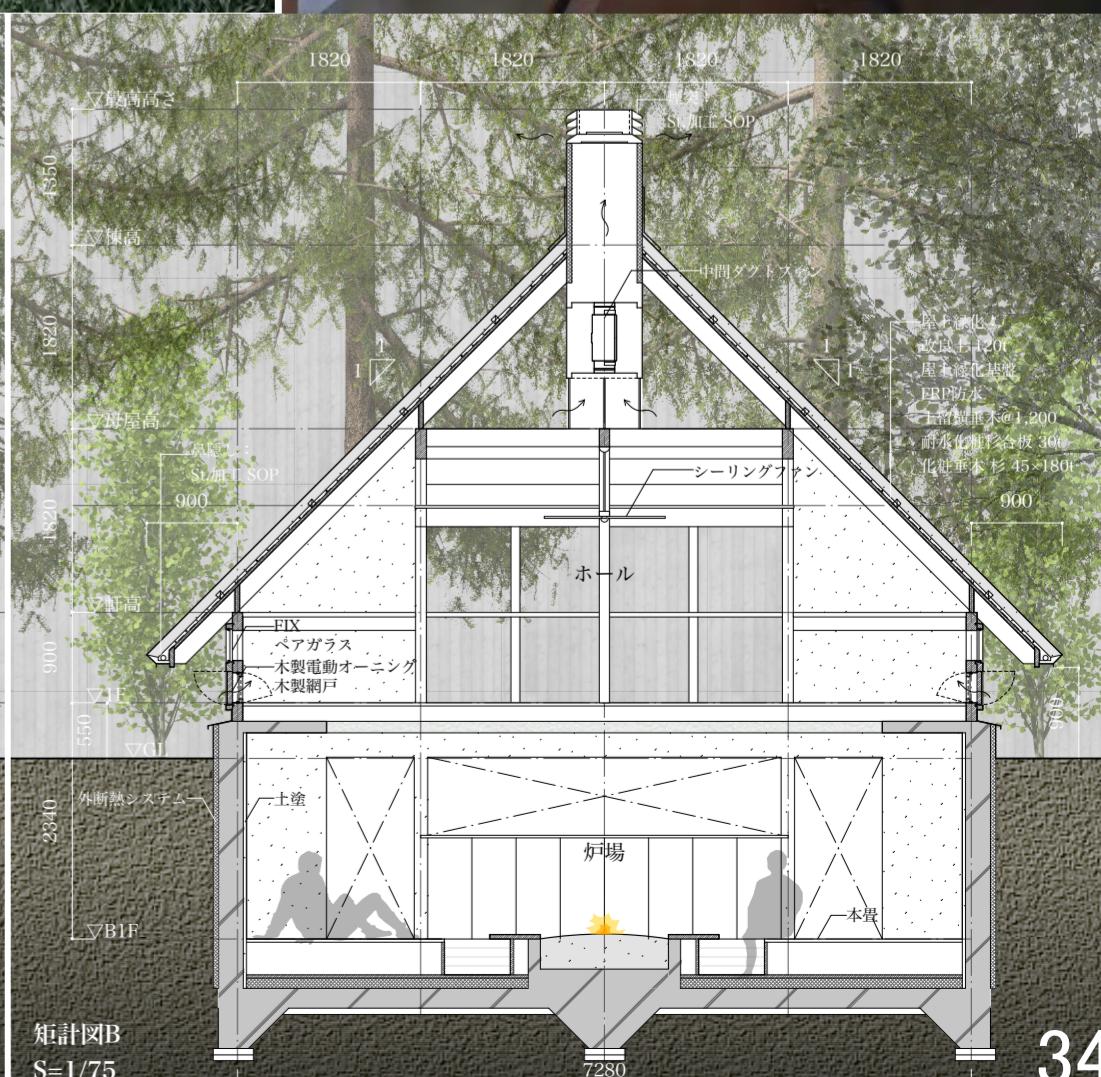
住まいの原点である堅穴式住居を再考することは、帰りたい家=守られる家という住まいの本質を振り返るきっかけになるのではないだろうか。



1F平面図 S=1/150



矩計圖



矩計図B